日本教育新聞　平成25年9月23日

いじめ問題に立ち向かう

予防教育④

—26—

山崎　勝之　鳴門教育大学大学院教授
予防教育科学センター所長

自分の長所など考え「自信」培う

『予防教育の光景』自尊心とかセルフ・エスティームは、学校ではお気に入りの教育テーマだ。しかし、その教育は安直に行われていると感じている。理論がないし、素人考えで進められている。発達の観点もない。評価にしても、本当に自尊心の高い子どもが、「自信があります」と答えるだろうか。疑問はとめどなく広がる。

鳴門教育大学で進める予防教育では、教育の柱の一つに「自己信頼心（自信）の育成」がある。理論から方法まで科学的で、本当の自信を付ける教育だという。ぜひ授業を見てみたい。

▼「自己信頼心」育成の位置付けと基本方針

予防教育の大目標は自律性と対人関係性の育成であった。その大目標を達成するために立てられた四つの教育の柱のうち自己信頼心（自信）の育成は、自律性の核である自分への信頼に直接関わる教育となる。この教育で目指す自己信頼心（自信）は、他者との比較による優越性からくる相対的な自信ではなく、絶対的に規定される自信になる。この自信の教育は、いじめ加害者の自尊心が低いことからも重要である。

▼目標の立て方とエビデンスの付与

四つの教育の柱ではいずれも、前回までに紹介したこの教育の理論が適用される。つまり、情動と感情をかき立てた状態で望ましい心の要素（ものの見方、考え方、振る舞い方など）を学習させ、全体をセットにして記憶化させる。各教育の違いと言えば、その心の要素を何に定めるかで、おのずと教育目標が違ってくる。

学校教育でよく見られる問題は、目標と方法が乖離することであろう。その原因の一つは、目標の抽象性が高いままに授業方法を考案することにある。そこで予防教育では、目標を抽象性の高いものから具体的なもの（操作目標）まで階層的に構成し、操作目標の下に方法をつなげる。自己信頼心（自信）の育成という目標の下に中位目標が四つ、その下に下位目標が八つ、さらにその下に50の操作目標がくる。そして、これらの目標設定全てにエビデンスが付いている。

▼実際の授業例　その1

さて、具体的に授業を紹介したいが、自己信頼心（自信）の育成に限っても授業は40時間ある。どの学年、どの授業を出そうかと迷うが、最初の授業紹介ということで小学3年生版を選び、授業の型に沿って3時間目を見てみよう。なお、授業開始前には小グループの構成を終え、児童はグループごとに座っている。授業の型に沿って、ライブ形式で紹介しよう。

①授業時の注意（グループ活動方法含む）　最初は、アニメでグループ活動の方法が流れる。各グループのキャプテン、記録係、他のメンバーの役割が簡潔に伝えられる。心地よい音楽に乗り、この授業の人気キャラクターによる説明が、早くも児童を引き付ける。

②授業の目的　本時の操作目標は、「自己の長所を探すことができる」。おなじみの目標をどう扱うのか、お手並み拝見。

③導入アニメ・ストーリー　アニメが始まる。この授業のアニメは、荒れ果てた大地を花盛りにするため、地を荒らすモグラ（モグモ）との対決だ。小学3年生ということで、愛らしさたっぷりのアニメにほのぼのする。児童も食い入るように見ている。

④活動助走　助走は次のクライマックスの準備。各自、自分の長所を付箋に書いていく。例示も十分で、どの児童もスラスラと書き始める。柔らかなBGMが作業効率を高める。教材は全て、グループの真ん中に置かれたツールボックス中にある（手際が良い）。書いた付箋は、フラワーボード（大判折り紙で作成）にグループごとに張り付ける。付箋の張られたフラワーボードが、美しく黒板に飾られた。黒板を教材で埋めるデザインがこの授業の見物の一つで、その大きさ、彩りが児童の目を引く。

次は、いよいよ授業の核、活動クライマックスだ。

ゲームに興じながら学ぶ児童たち（徳島県藍住町立藍住南小学校）

本ファイルの著作権は日本教育新聞社に帰属します。記事・本文・画像の、無断転載は固くお断りいたします。